

善隣

No.531 通巻798

2022年（令和4年）12月1日発行（毎月1日発行）

2022 12



一般社団法人 国際善隣協会



【善隣中国塾】（2022年10月21日）



【善隣古海塾】（2022年10月26日）

善 隣

目 次

2022年12月号

不可視の存在から ^{セクシュアリティ}性（生）の多様性 ^{ソ ジ}SOGI へ渡辺みえこ 2

先進ドイツに羽ばたく国費留学生

没後100年・陸軍軍医鷗外の青春日記藤川琢馬 11

父の無念

九十年ぶりに発見された口述筆記

講道館に楯突いた男の生涯細川呉港 19

陶々俳壇馬場由紀子選 25

中国ウォッチング編・訳 上松玲子 26

協会通信・同好会だより 28

2022年12月の行事予定 29

みんなの写真館 28

(姜晋如、八島継男)

— 善 隣 第531号 通巻798号 —

2022（令和4）年12月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051

FAX 03（3573）1783

発行人 矢野一彌

編集 原田克子

編集協力 朝 浩之、校 正 菅沼玲子

印刷所 (有)ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

— 。 — 。 — 。 —

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

セクシュアリティ

不可視の存在から性（生）の 多様性SOGIへ

日本女子大学他元非常勤講師 渡辺みえこ

はじめに

近年、多様性^{ダイバーシティ}ということが言われている。そのなかで性的少数者^{セクシュアルマイノリティ}が、さまざまな形で可視化され権利が主張され始めている。

クイア（Queer）は、かつては変態、異常者という性的少数者の侮蔑語だったが、一九九〇年代以降は、性的少数者全体（LGBT）を表し、その言葉を自らの誇りとして奪還して自称するようになった。

「普通」「自然」という「常識」も、強い抑圧制度だったが、それに外れる

人々（クイア）は自分の大事な部分を隠して生きなくてはならなかったが、このようなクローゼット（性的少数者が隠れる押し入れ）から抜け出てカミングアウトをして連帯し、人権を求める運動を発端にして少しずつ多様性が認められてきた。

歴史のなかで、美やジェンダーや「らしさ」から外れる者は、迫害されてきた。その人たちの名は「異常」「妖怪」「魔女」……さまざまな名で排斥され抹殺されてきた。

メドゥーサ（Medusa）は、古代には「女性の知恵」をあらわした太女神だったが、ギリシャ・ローマ神話では、

その視線で人を石に変える恐ろしい妖怪にされている。女神の見る力は父権社会では「妖怪」となる。

西欧キリスト教社会では、十三世紀ヨーロッパで、医療専門家としての男性医師の登場後、女性医療者が排除され魔女とされるようになっていった（注1）。

日本の女性解放（ウーマンリブ Women's liberation）の動きは、一九七〇年代、田中美津らによって「生きていくことの丸ごとの肯定」を願い、女の自治権、自主管理を願って、「産む産まないは女が決める。産める社会

を産みたい社会を」と、男並み平等を拒否し、母性愛という女性搾取に反対した(注2)。

彼女たちも当時は、男にもてないブス集団、などと「妖怪」「魔女」扱いであった。

やがて女性解放運動は、近代産業社会が生み出した性別役割分業、無償労働としての家事労働、再生産労働に女性を追い込む制度にも異議を唱えていく。

一方、縄文文化は、人間は動物と共に自然の一部であり、平等主義に立脚し戦争を回避する女性中心の社会であった、一万数千年にわたって続いたことを詩人の高良留美子は実証している。母系制のなかで、財物を生産、分配、贈与、享受する暮らしを続けてきた、と(注3)。

権力制度のなかですべての階級の下に女性というジェンダーがあった。それが生物学的本質であって普遍のものだということを受容させるためにあらゆる思想、宗教、科学のなかに女性の劣等性を体系付けた。女身不浄として、

主に仏教思想から土俵に女性をあげないというようなことが最近も起こっている。

戦争、暴力、ジェンダーについて若桑みどりは、以下のように記している(注4)。

「人間と戦争について考察した最高の本といわれるJ・グレン・グレイの『戦士たち』は、ヴェトナム戦争の最中の一九七〇年に出版された。彼はこの本のなかで、戦争が男性に与える『破壊の喜び』について書いている。戦争のもつ恐るべき力にとり囲まれると、そのようなことがあるとは夢にも想像しなかった何千もの若者たちが『破壊に対して激しく興奮する気持ちを抱く』と。

また「実際にマイケル・ムーアが『華氏911』でマイクを向けたイラクに派遣された二人のアメリカ人の兵士が、イラク人に銃を向けるときに興奮すると答えている。この兵士はイラク人を撃つとき、攻撃的な音楽をかけるそう。そうするといっそう気分が乗る」のだと、そうして「自分が実際にヴェトナムにいつ

たウィリアム・ブロイルズJrは、戦争への愛は、我々の存在の奥深くで、性と破壊、美と恐怖、愛と死が結合することが出来る唯一の方法かもしれない。男性にとって、戦争は深いところで、出産が女性にとって果たす役割ともっともよく似ている。それは生と死の力へのイニシュエーションなのだ」とコリン・ウィルソン『殺人の哲学』を引用して述べている。

男性研究の細谷実は、『男』の未来に希望はあるか』のなかで、「泣くな、男の子也」とか「男子は弱音を吐くべからず、痛くとも痛しと云ふな、苦しくとも苦しと云ふな」という大正の文学者大町桂月とその叔父の言葉を引用し「男たちに対するそうした禁止の強制は、近代日本において相次ぐ戦争に勝つために、また後発資本主義の苛酷な労働条件下で男たちを働かせるために必要とされたもの」だという(注5)。

そういう男権文化からの救いは、「自己実現の質転換と社交の復活が、男たち相互の首の絞め合い、その勝者にのみ与えられる〈幸福〉という罠から男

たちが抜け出せる可能性を拓く」のではないかとし、それは「かつての男たちの遊びの多くは、プロジェクトX、ゴルフ、釣り、マージャン、囲碁、飲み歩き、フーズクなど、男たちだけのイベント」であったが、そうではなく

「日本での伝統的な社交、たとえば茶の湯、連歌の会、花見・月見・紅葉狩りなどのグループでの集い、お祭りやその準備のための踊りや芸能の練習の集まり、日常の飲み会や茶飲み会、など」が、新しい社交ではないかという。

1. 『女権宣言』で断頭台に

フランス革命の人権の「人」とは男性 (man フランス語では homme) だった。フランス革命で多くの女性たちが尽力したが、危険な任務などに利用されたのちは、すべての権利を剥奪された。

女性の人権、参政権を求めた最初のフランス人女性、オランブ・ド・グージュ (Olympe de Gouges, 1748年〜1793年) は、一七九一年に

『女権宣言』を出した。

『女権宣言』は、前文で以下のように訴えている。「(前略) 女性の譲りわたすことのできない神聖な自然的権利を、厳粛な宣言において提示することを決意した」。

しかしこの宣言によって、一七九三年七月、反革命の嫌疑で逮捕され、断頭台に消えた。

日本近代では、女性の自我覚醒の宣言は『青鞥』でも「元始、女性の実に太陽であった」という有名な創刊の辞で始まった。その後、与謝野晶子の女権主義、平塚らいてうの母性主義、山川菊枝の社会主義フェミニズムなどが展開されていた。

それでも女性が参政権を得たのは戦後だった。それまで女性たちは、父権政治を変える手段をもたなかった。

一九六〇年代には、欧米中心に女性の連帯、解放運動が起こり、世界的に広がっていった。

アメリカではヴェトナム戦争反対から公民権運動、性革命へ、六〇年代半ばから第二波の女性解放運動が広がっ

ていった。

一九六三年にアメリカで出版されたベティー・フリーダンの『女らしさの神話』(注6) は大ベストセラーになった。そこで中流白人主婦の捕らえようのない問題、物質的豊かさでは満たせない不満、欠落感、孤独を「名前のない問題」と書いて共感を呼んだ。

ユダヤ系アメリカ人詩人でレズビアンのカムアウト(セクシュアリティなどを公言する)をしているアドリエンヌ・リッチは、女性が仕事を奪われ結婚、家事育児のなかでしか生きられないような制度を父権社会での「強制異性愛制度」(1966年〜1978年)(注7)と呼んで、日本の女性運動にも大きな影響を与えた。

その後ジェンダー(男女の性差)論、やがてセクシュアリティ論、二一世紀になってからは、セクシュアリティの多様性から、LGBTQxsが使われるようになった。

2. LGBTTからSOGIEへ

LGBTという言葉や概念は、二〇〇六年七月にカナダ・ケベック州モントリオールで初めて開催された、LGBTを含めた国際総合競技大会、「第一回ワールドアウトゲームズ」で採択された「モントリオール宣言」以降、国際連合などの国際機関において性的指向 (SO=Sexual Orientation) や性自認 (GI=Gender Identity) などの人権問題関係の公文書でも用いられるようになった。

国際会議には百か国以上から約二〇〇〇人の代表者が集まった。会場での宣言の本文をウィンブルドン選手権の大会史上最多優勝記録テニスプレーヤーでレズビアンカムアウトをしているマルチナ・ナブラチロワも、読み上げた。

「万人は生まれながらに尊厳と権利において自由にして平等である」と謳う世界人権宣言の第一条は未だにSOGIの人々に実現されていない、と。そして以下の事実を挙げ、これらの禁止を求めている。

九か国(二〇〇六年当時)が同性愛

に死刑を科していること。多くの国でLGBTに対する拷問、暴力、憎悪犯罪が行われていること。世界の多くの地域でLGBTが意に反して異性との結婚を強制されていること。インターセックスの当事者が暴力の一形態、つまり性器切除や不要な手術を本人の理解や同意なく行われていること。亡命については、国や国際連合難民高等弁務官に性的指向や性同一性に関して難民の地位を承認するよう法改正を求め、そして移民の問題について国際条約が同性カップルに異性の婚約者と同じ権利を承認するよう求めている (https://ja.wikipedia.org/wiki/LGBT)。

LGB (同性愛、両性愛) とT (トランスジェンダー) は、異なる存在で違和感をもつ人もいるが、トランスジェンダーの数が少ないため、性的少数者として連帯することを選んだ。

Lはレズビアン (恋愛感情や欲望が女性に向かう女性。行動科学では女性愛)、Gはゲイ (恋愛感情や欲望が男性に向かう男性。行動科学では男性愛)、BはバイセクシュアルⅡ両性愛、

および汎性愛 (パンセクシュアリティⅡ Pansexuality ジェンダーやアイデンティティを問わない)、Tはトランスジェンダー (Transgender 出生時に割り当てられた自己の自認する性と一致しない人) である。

Xは、男でも、女でもない性自認をもつ人で、sは、複数で未だカテゴライズされない沢山のセクシュアリティがあるとされている。またアセクシュアル (asexuality 無性愛者) は、他者に恋愛感情や性欲が向かわず他者への性的欲求などがないか、少ない人。

LGBTは性的指向だが、T (トランスジェンダー) は性自認なので、すべての人に当てはまる概念としてSOGI (ソジⅡ性的指向と性自認) が、国際人権法などでは、二〇一一年から使われるようになった。

シスジェンダー (Cisgender) は、自分の身体的性差に違和感がない性自認で、出生時の戸籍の性で生きている人である。

「Cis」は、「こちら側に」という意味で主に化学分野で、原子や原子団が

同じ側に位置している接頭辞であり、トランス (trans- 乗り越えて移動する) の対義語である。

異性愛でシスジェンダーが自然、正常とされ、そのほかは反自然、異常などと反社会性、病理とみなされてきたこのような異性愛／シスジェンダー中心主義を相対化して、異性愛／シスジェンダーも多様な性の一つとするという考えである。

日本では二〇一五年に、東京都渋谷区で『渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例』が区議会本会議で可決・成立し、同性カップルを「結婚に相当する関係」と認める「パートナーシップ証明書」を発行した。同年十一月には、東京都世田谷区で「世田谷区パートナーシップの宣誓の取扱いに関する要綱」が制定された。二〇二〇年までに世田谷は一三八組、渋谷区は五〇組が利用している。

3. 見えない／見られることと支配／配られること／支配されること

一九六〇年代から七〇年代にかけて女性たちは、さまざまな改革をした。しかし女性差別は日常のなかに深く組み込まれている。

見る、創造する、支配する……のは、支配者、権力者、男性だった。ここには圧倒的にジェンダーの非対称性がかかわっていた。カメラマンとモデル、画家とモデル、書く主体である男性と表象される女性……。

見ることの権力性を、ミシェル・フーコーが『監獄の誕生 監視と処罰』(一九七五年)(注8)で批判した。

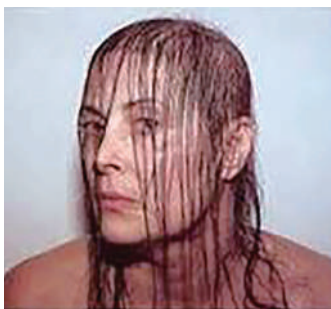
一方的に見る構造の一望監視装置(パノプティコン)(Panopticon)は、「すべてを見る」という意味で、それはイギリスの哲学者ジェレミ・ベンサムが設計した刑務所その他の施設の構想であって、十九世紀フランスの監獄建築で、獄房に収監された囚人が常にすべての方向から看守に監視されているという監獄建築によって規律化され従順な身体に訓育されていく構造である。フーコーは、これを社会のシステムとして管理、統制された制度の象徴であ

ることを示した。

ギリシャでは、見るということとは、深く知ることであり、プラトンの idea につながる権威ある男性のものであり、男性論理であった。

4. 見られる「私」から、「私」を見つめる「私」へ

常に見られる美しい若い女性のモデルが、カメラマンの要望どおりポーズをとるという状況をパロディ化した作品を発表しつづけた女性作家に、ニューヨーク、ユダヤ系ドイツ人移民ハンナ・ウィルケ(Hannah Wilke 一九四〇年〜一九九三年)がいる。



ハンナ・ウィルケ

フェミニズム美術を手がけたパフォーミング・アーティスト、画家、彫刻家、写真家として女性器の形のチューインガムを体に

付けた写真などもある。

晩年、癌に冒された死までの様子を自らの身体や顔を撮影した写真集“*Intra Venus*”（私自身の内なるヴィーナス）を出版した。自分の命と死にゆく自分を見つめる彼女自身の強い視線が見るものを刺す（注9）。

5. 目合う

見ることは、『古事記』では、麻具波比は目合ふ（嬉う）ことで、男と女の目と目が合うことは深い契りを交わすことであった。

イザナミが、「我をな視たまひそ」（決して覗かないでくださいね）と頼んだことをイザナギに裏切られて、黄泉醜女と共にイザナギを追う。

『日本書紀』の神話、イザナギが、妻のイザナミを黄泉の国に迎えに行く神話は、ギリシャ神話のオルフェウスの影響があると吉田敦彦は、以下のよう述べている（注10）。

オルフェウスは、蛇にかかとを噛まれて死んだ妻を追って冥界に降りるが、

冥界の王ハーデースと妻ペルセポネの前で竖琴を奏でながら妻への思いを切々と訴える。

遠征の折にもセイレーンの呪縛もきかなかったほど美しく歌い、冥界のあらゆる者を魅了した。王も王妃も心を動かされ妻エウリュディケの帰還を許した。音楽家の起源でもあるとされている。

禁忌は、振り向いてはいけないという約束だったが、オルフェウスが、地上に出ようとするとそのときに妻の足音がしないのを不安に感じ振り向いた。オルフェウスは、不安のあまり彼女の存在、距離を確かめるべく振り返らずにはいられなかった。そしてエウリュディケは冥界に引き戻される。大事なものを獲得するには禁忌があった。

6. フェミニズムとキリスト教

man は人類＝男性で、人間を代表してきたが、女性も人間であり人間の権利を主張してきたことによって男性もジェンダーのひとつとなった。西欧

文化の基盤に深く根差しているキリスト教文化のなかの女性差別もフェミニストたちは批判してきた。

日本近代にも大きな影響を与えたキリスト教文化だが、主にアメリカの第二波フェミニズムは、聖書と教会の男性中心主義と決別し、姉妹愛、女同志の連帯を尊重し一九六〇年代から七〇年代にかけて「女性の教会運動」を行い、女性神学者も輩出され、論文が次々に発表された。

また「クライスタ」（キリストの女性形）という運動では、「さまざまな点からイエスは女であっても不思議ではないし、両性の可能性がある」として、一九七三年エドウィナ・サンデーが、彫刻で、黒人女性の十字架キリスト像を作っている。

キリスト研究では、ヘブライ語のあばら骨（rib）とは横面（side）の意味で、アダムの両性（両性具有）のうち女性の部分が離された、という解釈を打ち出している。

イエスはユダヤの間に広く使われた男性名だが、キリストは、油を注がれ

たもの、イスラエルの王（救世主＝非固有名詞）という意味で男女両性にあるという（注11）。

7. 相撲の女人禁制

二〇一八年四月に、土俵で倒れた市長を、女性看護師が救急救命しようとしたら、「女性は降りろ」と行司が言った。

相撲も血の不浄も伝統ではないと、吉崎祥司・稲野一彦は、「相撲における「女人禁制の伝統」について」（注12）に以下のように記している。

最古の相撲は女相撲であった。日本の史書に初めて「相撲」という言葉が登場したのは、『日本書紀』の雄略天皇の以下の部分である。「雄略天皇が采女を呼んで、采女がその場で服を脱いで、相撲をとった」とある。

また一五九六年刊行の「義残後覚」^{ぎざんごかく}に、相撲の記載がある。勸進相撲をしている側の力士に挑んでいくなかに女性の僧侶（比丘尼）もいた様が描かれている。



そこで
は昭和の
初めから
第二次大
戦まで、
女相撲が

しかも、男性の相撲の本場、回向院で開催されている。明治には、欧化政策によって、野蛮な風俗として排斥されそうになるが、明治四二年（一九〇九年）、常設館を設置し、その名前を「国技館」と命名した。明治末期に国技となった相撲は、見世物である存在から、男性力士の特権的存在として権威付けを行って、神道や仏教を再び取り込み、自らが伝統と歴史に基づいた、正当な文化の継承者であることを表明していく。この流れのなかで、古くからあった神道の不浄の概念を利用して、女人禁制の概念を徐々に創り出していった。

昭和に入っても、女相撲は続いた。遠藤泰夫『女大関 若緑』では、遠藤泰夫の母親である女相撲のスター、若緑の人生を綴っている。

人気だったことをうかがわせる。
山形では第二次大戦後十年経った、昭和三十一年まで続けられていたようだ（<https://amzn.to/2HjedUb>）。

8. 女性への拷問制度、人体変工

父権社会は、女性の劣勢・支配を示すものとして、人体変工までしてきた。中国で、北宋から辛亥革命ごろまで千年間余り続けられてきた纏足制度は、女児が四〜五歳になると帯状綿布で両足の足首から先をきつく縛り、発育を抑える。

「小脚一双、眼淚一紅（纏足をするには、甕いっぱい涙を流さなければならぬ）」（注13）といわれている。

「三寸金蓮」といわれ約九cmが理想とされた。施術で敗血症や壊疽、麻痺や筋萎縮の障害を抱えたり、死亡する女性も少なくなかったという。上流階級や富裕層の纏足女性は、大勢の侍女にかしずかれ、「金蓮歩」でまろやかに歩く姿が、優雅でエロチック、魅力的であったと、また布できつく縛られた

足から漂う汗や膿や汚れの臭気は、あ
る種のフェロモンになったという。

歩行ができなくなって、災害時には
男性より死亡率が高かった。また、夫
をなくし子育てをする母親は困難な生
活を強いられた。庶民の纏足女性は、
不自由な足を引きずったり、膝立ち膝
歩きしたりして農作業や家事などに従
事した。

女真族（満州族）の清朝が纏足禁止
令を出しても、解纏足は纏足をするこ
とよりも苦痛でもあったり、纏足の足
が「玩蓮」と呼ばれる官能の開発が
あったため、夫の要望から再纏足が多
かった。

ジュディス・バトラーが文化構築主
義でいうように人間の性は、自然の欲
望というよりも、文化構築されるのか
もしれない。

またコルセットは、吉岡郁夫（注14）
によれば、ヨーロッパでは、近年まで、
腰の細い砂時計型の体形をした女性が
好まれ、そのため呼吸器疾患や肋骨の
変形、内臓の損傷、流産の原因なども
指摘されていたが、コルセットをしな

い女性はみだらな女とみなされ、中世
ヨーロッパから二〇世紀半ば頃まで使
用された。

そして現在も主にアフリカ諸国中心
に少女たちに行われているFGM（女
子割礼、女性外性器切除）は、年間二
百万人、累計十三億人であるといわれ
ている。

これには文化相対主義か普遍的人權
主義かの論議が行われてきた。

女子割礼もその文化の伝統であると
の主張から第一世界のフェミニズム批
判もある。

結婚が女性の生きる道である文化の
なかで女性たちは、これをしなければ、
結婚できない、不浄であるとして皆と
一緒に食事ができない、村のなかで生
きられない、などの差別を受ける（注
15）。

死の危険、感染症、ショック死など
も多い少女たちへの切除（賛成派は手
術という。不完全に生まれてきた女児
を治療するとして）の習慣に対して、
二〇〇三年七月にはモザンビークの首
都マプトで、女性器切除を含めたあら

ゆる性暴力、性差別を禁じ、男女同権
を定めた「人及び人民の権利に関する
アフリカ憲章に関するマプト議定書」
が採択されたが、実際には改善はほと
んど見られない。

おわりに

視線のなかにさえ父権社会の権力が
構造化されているというのを見てきた。
このような権力制度を見直し、人間が
生きやすい世界にしていくなために若桑
みどりは、以下のような提案をしてい
る。

「戦争と軍事化を阻止するために、
今国家にたちむかうことや、国家を超
えることは普通の人間にはできない。
だが、あらゆる局面で、軍事化を起こ
す」要因を「無害化することはたった
今からでもできる。男女の共通の体験、
男女の共有の価値を創りだし、あらゆ
る他者差別、あらゆる暴力肯定の文
化を点検し、これをなくすことであ
る」（注16）として「われわれは、無
血の変革をめざしている。そこには大

袈裟な革命理論も、劇的な展開もない」と、また国家という大きな権力を変革していく力について「われわれは、孤独ではないことをいつも確認しなければいけない、そうしないと威嚇に負けてしまうだろう、世界の女性と密接につながっていかねければならない、国際的なネットワークによって「国家を超え」なければならぬ」と結んでいる。

軍事力、閉鎖的国家主義、軍拡競争、父権主義へ傾斜していく現在の世界に二〇〇五年に書かれた若桑の言葉が、今ますます響いてくる。

一九七九年国連での女子差別撤廃条約が成立し、日本も八五年に批准し、男女機会均等法などが法制化されて少しずつ変わってきた。

ジェンダーの意識改革もなされ、女性の仕事、主体性、女性であることの肯定がされていくことのなかで女性同性愛や多くの性的少数者も隠された、クローゼット存在から可視化されるようになっていくだろう。

注1 バーバラ・エレンライク、ディアドリー・

イングリッシュ／長瀬久子訳『魔女・産婆・看護婦 女性医療家の歴史』法政大学出版局、一九九六年、原書1973年。

注2 田中美津『いのちの女たちへーとり乱しウーマンリブ論』田畑書店、一九七一年。

注3 高良留美子『見出された縄文の母系制と月の文化〈縄文の鏡〉が照らす未来社会の像』言叢社、二〇一一年。

注4 若桑みどり『戦争とジェンダー』大月書店、二〇〇五年。

注5 細谷実『男の未来に希望はあるか』はるか書房、二〇〇五年。

注6 ベティ・フリーダン／三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房、一九六五年、原書1963年。

注7 アドリエンヌ・リッチ／大島かおり訳『嘘、秘密、沈黙』晶文社、一九八九年、原書1966／1978年。

注8 ミシェル・フーコー／田村俊訳『監獄の誕生―監視と処罰』新潮社、一九七七年、原書1975年。

注9 ハンナ・ウィルケ『ジェンダー―記憶の淵から』東京都写真美術館・東京都写真文化財団、一九九六年。

注10 吉田敦彦『ギリシャ神話と日本神話』みすず書房、一九七四年。

注11 生駒孝彰『神々のフェミニズム』荒地出版社、一九九四年。

注12 吉崎祥司・稲野一彦「相撲における「女人禁制の伝統」について」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』二〇〇八年。

注13 岡本隆三『纏足物語』東方書店、一九八六年。

注14 吉岡郁夫『身体の文化人類学―身体変工と食人』雄山閣、一九九四年。

注15 吉岡郁夫、前掲、注14。

注16 若桑みどり、前掲、注4。

筆者略歴（わたなべ みえこ）

一九四三年生まれ。横浜国立大学大学院芸術修士。

著書…『女のいない死の楽園 供儀の身体 三島由紀夫』パンドラ発行、

一九九七年、第一回女性文化賞受賞。『語り得ぬもの…村上春樹の表象』

御茶の水書房、二〇〇九年。

第六詩集『空の水没』思潮社、二〇一三年（第十回日本詩歌句大賞受賞）

ほか。

美術…第十二回新世紀美術協会奨励賞（一九六七年）。第二五回新世紀

美術協会文房堂賞（一九八〇年）。

先進ドイツに羽ばたく国費留学生

没後100年・陸軍軍医鷗外の青春日記

藤川琢馬（会員）

森鷗外（森林太郎）（1862～1922）は明治17（1884）年から4年間、陸軍軍医としてドイツに留学し、「在独記」という漢文体の日記を書いた。これを仮名混じり文に改め、初恋の女性に関わる部分を削除し、明治21年『独逸日記』として発表した。

世界の先端にあって何ら臆することなく行動する林太郎の活気あふれる留学記を目にすると、目下3年間ものコロナ禍により強いられた社会的な鬱屈、不安定な内外の政治情勢、あるいは長期にわたる日本経済の停滞などから、総じて覇気に乏しい現社会とわたくし

たちに新鮮な刺激を与えてくれる。それは林太郎個人としての優れた人物によることはもちろんだが、明治新政府の、さらに遡れば幕末、徳川幕府から続く欧米への度重なる使節団・留学生の派遣と彼らの進取の気概、同時に人材を育成しあらゆる先進文明を取り入れようとする、確固たる国家の意志を見ることができるところであろう。林太郎の日記には、将来を背負って立つ国費留学生の使命感が感じ取れる。留学記を通じて、およそ130年前のドイツの日常の一端に触れることができるのも、わたくし的には興味がある。

本年は鷗外没後100年に当たる。留学記を理解する便宜のため、本稿では荻原雄一現代語訳『鷗外・ドイツ青春日記』（2019）を利用した。

1. ドイツ留学に至る経緯、留学先と職務

明治5（1872）年、林太郎10歳のとき父と上京し、官立医学学校入学に備えてドイツ語習得のため私塾に入学。明治6年12歳で第一大学区医学学校（現東京大学医学部）に2歳多く偽って入学し、ドイツ人教官に習う。

明治14年19歳で本科卒業、同年陸軍軍医副（中尉相当）となり陸軍病院勤務。

明治17年22歳、衛生制度の調査・衛生学の習得を目的にドイツ留学を拝命し、8月24日出発、10月7日マルセイユ着、陸路にて10月11日ベルリン着。船中の記録は『航西日記』として発表。明治17年11月から11か月間ライプツヒで、5か月間ドレスデンで、さらに



ベルガモン博物館

13か月間ミュンヘンで、大学研究室において勉学に勉め、ドレスデンでは軍医学講習会に参加。

その後の明治20年4月中旬から21年7月初旬までの14か月間強、ベルリンでコッホ教授の衛生研究所において細菌学を学んだ。

留学の合間に国際会議出席の職務を担った。すなわち明治20年9月下旬カールスルーエでの赤十字国際会議に日本代表の通訳として随行、同年9月末から11日間ウィーンでの万国衛生会に日本代表として出席。

明治21年7月5日帰国の途へ。ロンドン、パリなどに立ち寄った後、7月25日マルセイユ発、9月8日横浜着。

2. ドイツ留学全体としての考察

考察

・留学当初から多数の伝手^{つて}、友人、知人たちと交流した。「ドイツ留学記」はさながら交遊録といってもいいくらいで、誰とどこで何をしたという記述が多い。留学の13か月強を経た明治19

年1月3日の記述には石黒忠恵^{ただのり}軍医監からの手紙で、君は衛生学の一科を専修しなさい、と言われ、これは誰かが森は社交ばかりしていると密告したのであろうと記している。

・ドイツで交流した人たちには、留学や移動でまず挨拶や手続きをしなければならぬ在独の陸軍上層部、公使、官僚、伯爵などがいた。また陸軍軍医関係だけでなく、分野の異なる先輩、後輩、友人などの留学生仲間や同じ船で来た留学生もいた。橋本綱常軍医総監の助言に従って決めた留学先大学・研究室の教授や同僚、下宿先や食事の世話になった家のドイツ人家族、そこで得た外国人の知人たち、また演習先（ザクセン軍団）のドイツ陸軍、軍医関係者などがいて、幅が広い。

・それは留学当初からドイツ語のハンディキャップがなかったことにもよる。語学が未熟だった場合は、語学向上のため同国人を遠ざけることはよくあるが、森にはその理由がないので日本人とも頻繁に交流した。出かけるにしても多くの場合、誰かと一緒であった。

・またそれは、潤沢な留学資金にもよろう。ライプツィヒ到着翌日（明治17年10月23日）の記述には、下宿は朝食（パンとコーヒー）付き40マルク、昼・夕食はある老婦人宅で取り50マルク、暖房費や洗濯料金など含め生活費は100マルク必要だが、給与は年に3000〜4000マルク、家への仕送りはあるが全く十分。ドイツでけちけち暮らす理由がどこにある？という。明治〜平成値段史（WEB）によると、明治18年の為替は1マルク＝28銭、すなわち給与は年840〜1120円（月70〜93円）に相当し、生活費は月28円程度で済み、独身の林太郎にとって全く潤沢である。なお明治18年の給与所得者の年収は178円（WEB）で、当時の1円は現在1万円に相当する。

・訳書の「あとがきに代えて」において訳者は、鷗外のドイツ留学は能力・才能をめいっぱい発揮して青春を満喫していたと記述し、鷗外の留学から16年後の明治33年に、文部省から年額1800円でロンドンに留学した夏目漱

石と比較している。都市部消費者物価指数は明治17年から明治33年までおよそ1・5倍上昇した（WEB）ので、33年の1800円は17年であれば1200円に相当し、漱石の留学資金も数値上は潤沢である。しかしこの額では名門校ケンブリッジ大学に行くには資金が足りず、切り詰めた生活だった。イギリスは私学、ドイツは公立なので学費は相当異なり、二人のふところ事情の違いは十分理解できる。

・ドイツ留学記が交遊録といえるなら、日記の記述がなかった日は特段に記述する内容がなかった日、すなわち日常生活のごくふつうの日である。それは個人的な買い物、家事、雑事、自室での勉強や調査、論文執筆、あるいは研究室での実験、大学での受講などである。以下に示すように、留学期間の初年と最終年の日記記述日数は、それぞれの全日数の27および22%であったのに対し、留学生活の常態である間の3年間は45〜51%である。大雑把に言えば2日のうちの1日は誰かと交流があったと考えられる。

明治17年10月12日〜12月31日		
明治18年	167日	22%
明治19年	170日	27%
明治20年	188日	45%
明治21年1月1日〜5月14日	30日	46%
		51%
		22%

・林太郎は細菌学や衛生学・栄養学など先進知識の習得に励み、同時に陸軍軍医としてドイツ軍団の演習に参加し軍関係や先進技術の見学も積極的に行っていた。日常、軍医・日本人としての矜持を保っていた。

3. 留学記の内容

3・1 衛生学・栄養学の研究

留学の当初はライプツィヒで日本茶の分析から始まり栄養学を修め、細菌学を受講、ミュンヘンではビールの利尿作用の研究、一番長く滞在したベルリンでは細菌学の月例会開始など勉学に励んだ。コッホ教授のもとで水道源・下水道・消毒所など各所を見学するとともに、下水・と殺場汚水を採用して

衛生実験を行い、公衆衛生の研究とともに実務にも取り組んだ。これらの研究には、しばしば流行したコレラの防疫が背景にあろう。

3・2 軍医としての研修

ドレスデン在留時には負傷者運搬演習の見学、ドイツ第12軍団（ザクセン軍団）の秋季演習参加、軍陣衛生学受講、兵器庫・戎衣庫・兵車庫・武器庫・澣衣廠（軍服の洗濯場）の見学、刑務所見学とくに衛生関係を観察、フリードリヒ病院の衛生面の見学、ベルリンでは軍需品貯蔵所見学、ドイツの軍医部予算の講義、カールスルーエ担架兵団の演習見学、陸軍病院・歩兵舎・砲

兵営見学、陸軍病院内の化学実験場および蠟型陳列場見学のほか、ドイツ軍医による授業、近衛兵の兵営見学、囚獄の見学など軍医としての研修に励んだ。

3・3 執筆・講演・学会ならびに団体関係の活動など

論文執筆、学会・講演会への参加、ドイツ人の団体・日本人会などへの参加の記述も多い。ライプツィヒ在留時の最後に「日本兵食論」の大意を書き上げた。これは明治7〜9年東京医学校の教師をしていたドイツ人医師ウェルニヒによる、日本人の虚弱骨格は古来からの粗食な日本食によるものとした

た日本食批判に対する反論で、西洋食を日本兵食に取り入れようとする日本の学者に対しての批判的意見を述べ陸軍の立場を擁護したもののだが、国民の一般食においては、西洋食論者と同じ意見であるとした（後記）。

ミュンヘンでは「日本家屋論第二稿」をほぼ整えた。強健な兵を作るために衛生性のよい家屋にし

なければならぬという論である。また「駁正ナウマン論」に着手した。日本に対する誤解への反論である（後記）。そのほかドレスデン衛戍病院における衛生将校会での講演、地学協会で「日本家屋論」の講演、「日本住家の民俗学的衛生学的研究」などの出版手続き、ベルリンの在独日本人の集まり「大和会」でのドイツ語講演、コッホ研究室での論文「水道中の病原菌について」が『衛生学雑誌』に収載、など。

またドレスデン在留時の最後にドイツ人軍医監の求めに応じ週5時間日本語を教授し、ベルリンでは週2回クラウゼヴィッツの難解な兵書「戦争論」を講じた。クラウゼヴィッツはプロイセンの將軍・陸軍大学校長で、同書は戦争とは何かという分析的・理論的な戦争哲学の書である。森は後に訳書を出した（明治34年）。

また『ドイツ医事週報』編集長を訪ねた。これは最近横浜十全病院のアメリカ人医療宣教師シモンズが、日本におけるコレラ予防の実態や脚気発病の原因などを取り違えて発表したのに対



軍服正装の森田太朗

し、訂正し反論を加えたいと依頼に行ったものである。コレラは明治新政府となった後も2〜3年間隔で数万人単位の患者を出して流行した。明治12年と19年には死者が10万人の万台を超え、日本各地に避病院の設置が進んだきっかけとなった。

3・4 先進技術・知識の見聞

自身の研究や軍医としての研修以外に、先進技術に触れ、工場設備などを見学して見聞を広めた。ドレスデン在留時、電気灯の機関を見学した。ミュンヘンでも電気灯と換気装置の見学を行っている。電灯は1879年エジソンが白熱電灯を実用化し、81年ニューヨークで電灯事業が開始されたのが始まりで、日本では85年白熱電灯が灯され、86（明治19）年東京電燈会社が開業したのである。森の留学前の日本では電灯を経験していない。またガス製造所、中央給水所、ゲーエ工場（蒸気機関で丸薬を製造する大工場）を見学し、国立工業大学において講演「電気灯の現況」を聴いた。人工酪製造所を見学し、製品は北ドイツとイギリスに

輸送して肉体労働者の食卓にあがると聞く。これは牛脂、牛乳、油および塩を原料としてマーガリンを造るもので、副産物として頭髮や髻に塗る香脂を造る。フランスでは1869年ナポレオン三世が軍用・民生用に安価なバター代替品を懸賞募集し、後にマーガリンが造られる発端となっている。酪農国のドイツやフランスにおいても、当時はバターは高価であったことがわかる。

3・5 語学、読書など

得意なドイツ語を駆使し、国際会議の書類を作成し通訳を務めた。また折に触れて漢詩を作り、中文はお手の物と称している。ライプツィヒで大学が夏休みに入ったとき洋書をひもといた。ギリシャ文学、フランスの小説、ダンテの神曲、ゲーテ全集などである。ライプツィヒでは師について英語を1年間学んでいたことが記され、ドレスデンではドイツ人軍医についてスペイン語を習うことにしたと記述する。ベルリン滞在時には毎日曜日フランス語を習う約束を交わしたとある。ほかに、ミュンヘンでは速記法の研究をし始めた。

3・6 コンサート、観劇、見物ほか
各所でコンサート、オペラ、サーカス、観劇などを重ねた。それらの中でイギリス人が演じる日本劇、サリヴァン作曲の喜歌劇「ミカド」を観たことが記述されている。訪欧した年ロンドンで「日本展」が開催され、ロンドン中で日本への興味が沸かせた。この時期に「ミカド」が製作され672回の記録的な興行となったが、天皇にとっ



オクトーバーフェストでの巨大なビアホール（1978年9月）

て侮辱的という理由で上演中止となった。また、ドイツ人により1877年以来発掘が続いていたペルガモン（現トルコ・ベルガマ、前3世紀頃の古代都市遺跡でヘレニズム文化の中心地）を見学した。発掘されたゼウス祭壇はベルリン・ペルガモン博物館に復元されている。これらはすべて、ドイツ人や日本人の友人知人と行動をとともにしている。

3・7 医学や近代化に関わる記述

明治18年4月父からの手紙で、流行りの痘瘡が減少し始めたことを聞く。脚気の原因の論争があり、日本海軍ではイギリス海軍の経験に倣って麦飯を食わせ、疾病は脚気菌が原因ではないと考えるが、陸軍では白米を食わせるという宣伝文句で農家の次男三男を集めているので、米食中心を譲れない。森は学問的根拠を求められているが、陸軍を背負っているため海軍に同調するわけにいかない。明治19年7月品川彌二郎公使と食事中、麦飯は本当に体にいいのかと問われ、舌が旨いと感じる食べ物が身体にいいと答えたと記す。

ライプツィヒでアメリカ人の友人と飲んだ際、この友人の家系は肺結核なので結婚を避けていると聞き、森は、最近コッホ先生が結核菌を発見したことを学会発表したので、肺結核が遺伝するというのは過去の妄想だと諭した。「羅馬^{ローマ}学会」の友人からの手紙が届いた。この会は日本語の表記をローマ字にしようとする主張している。森はヘボン式の綴りで返書を出したところ、羅馬字会のやり方と一致していて、君はすでに羅馬字を用いている、天才だねと驚かれた。地学協会に行き、親しくしているロート軍医監による「マラリア地方論」の発表を聴いた。

ドレスデン在留時地学協会で、日本に長期滞在し旭日章を授章したナウマンの「日本」という講演を聴いた。日本の近代化について誤った見方をしていることに對し、日本人の矜持として耐えられなく反駁し、会場から喝采された。欧州の日本事情論は偽りが多いと記述する。ハインリヒ・ナウマンは明治8、18年東京帝国大学に招聘され日本における地質学の基礎を築いた。

貝塚も2、3発見し、ハインリヒ・フォン・シーボルト（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男）の貝塚調査を助けた。また日本で1万5千年くらい前まで生息していた象の横須賀で発見された標本について研究し、ナウマンゾウと呼ばれるようになったことで知られる。

3・8 ドイツにおける慣習や日常に関わる記述

明治17年10月ベルリンに到着し、橋本軍医総監に連れられて青木周蔵公使に挨拶した際、公使から学問というのは机上に置いた本の文字を追うだけを目指すのではなく、西洋人の考え方、生活ぶりとか礼儀とか、こういった風俗や習慣をじっくり見極めれば、それでもう洋行の手柄は十分だと諭された。

ライプツィヒで初めての下宿先を訪ねた折、羽毛の掛布団の軟らかさ、軽さ、暖かさに触れ、ソファという長椅子のちよつと休める便利さを知った。ライプツィヒの街は煤煙が空を蔽い、家々の白亜の壁は塗り替えても、何日も経ないうちにまた黒ずんでしまう。

教会の鐘の音がひねもす耳にうるさい。レストランと煙草屋のほかは日本と違ってよく休む、とドイツに対する新鮮な印象を記述する。1月に男も女もスケート靴を履いて、手をつなぎながら滑りまくるスケート（踏氷）という遊びを初めて見た。下駄や草履・草鞋は、履物を脱ぐ習慣の日本の住環境では便利だが、スケートとは無縁である。ドイツ語には「懐かしい」を意味する言葉がない。言葉がないのは、その感情がないからだと観察する。

ドイツ人のビールを飲む量に驚く。半リットル入るドイツのビールジョッキで25杯も飲み干す者が稀だとはいい切れないという（日本では明治23年ビール大瓶が18銭と高かったので大量に飲むことはあり得なかった）。遊歩道の並木路にあるベンチは若い男女に占められ、むやみに身体をくっつけ合って唇を重ねているのに誰も気にしない。デューテという紙袋で売るサクランボを貴婦人といえども食べ歩きする、など日本では考えられない光景に目を奪われる。

十字架会に加入しないかという誘いに乗った。会には規則があり、生涯の失策3つを挙げなければならない。ただしすでに婚約者がいたり既婚者はあと2つを挙げればいい。集めた会費は貧民を救助する資金に充てられるらしく、この会は国中にあると聞く。

友人と「ボウレ酒」を飲んだ。真冬になるとこの酒を温めて、「グリュウワイン」と称して飲む。12月24日、以前ライプツィヒで下宿していた家のクリスマスに行き、プレゼントを交換した、ドレスデンで友人たちとグリュウワインの盃を挙げ、元旦の零時ぴったりにProsit Neujahr.（新年おめでとう）と叫んだ。1月20日ドイツ人の友人宅で誕生日会を開いてくれ（森の誕生日は19日）、二十数名集まった。テーブルには贈り物が並んでいた。

明治19年3月8日ミュンヘン着。街なかには奇怪な服装をした男女が行き交い、1月7日から3月9日の灰の水曜日まで謝肉祭（カーニ

バル）で、日本の盆踊りの賑わいを思わせた。断食と苦行の期間に入る前に「肉よ、さらば」と飲み食いし、どんな騒ぎをする風習は昔から変わらない。マックス・ヨーゼフ一世の旧居城に行くのに、蒸気機関で街なかを走る軌道車に乗った。この年の6月バイ



カーニバルでの雑踏（2018年3月）

エルンのルートヴィヒ二世が湖で溺死し、侍医グッデンも溺死した事件を耳にした。ワーグナーを庇護し、ノイシュヴァンシュタイン城ほか豪華な宮殿建設を行って浪費に溺れた王である。学生の決闘がある、見に行かないかと誘われた。ドイツの学生の多くは中世の騎士道の名残というべき慣習を持っている。主張し合い争論の末に、結論を果し合いに委ねる。終わると握手して和を講じる(『独逸日記』原文には詳細に情景ややり方が記述されている)。十月祭(オクトーバーフェスト)では競馬、自転車競走ほか見世物小屋(人魚、河童など)が立つ。馬鹿馬鹿しい、と記す。

ドレスデン在留時サクセン軍の演習に参加していたある日、ステレオスコップを初めて見た。2枚のレンズで写真を立体的に見せる装置である。ミュンヘンで菜食主義者の料理店で昼食を取った。当地には著名な栄養学者フォイトがいるのに、こんな妄想を信条とする人たちがいるのはまことに不思議だと記述する。菜食主義は19、20世紀に世

界に広まり、1908年に国際ベジタリアン協会が設立された。西欧の多くの国で現在(2010年)総人口の10%前後いる。イタリアで亡くなった友人に遺児がいることを聞く。日本人が欧州に来て子を産ませた例は少ないが、留学生ごときが財力すらなくて、他国に醜を遺してはいけない、という。ベルリンで友人とティーアガルテンにある「獣苑」に入り、東に位置する凱旋塔に登った。街を俯瞰すると、四方の人家の煙突からは煙がもうもうと噴き出していた。

家書が届き、弟篤次郎が菊五郎や伊勢三郎の声色をまねして拍手喝采された、などと記されていた。当時声色は人々の楽しみであったことがわかる。11月3日天長節の宴が公使館で開かれ、シーボルトほかと出会った(森が会ったのはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの長男アレクサンダーであろう)、乃木とも会った(乃木希典は明治20年1月〜6月政府の命でベルリンに留学していて、森との交流があった)。

ドイツの歴史や伝統、宗教に基づくこれらの慣習の多くは現在も変わっていない。都市環境は現在大きく改善されたが、ライプツィヒやベルリンのみならず、煤煙や大気汚染は石炭をエネルギー源とした当時避けることのできないものだった。十字架会の会則やカーニバルなど、遊び・ふざけ・冗談が半ば公的な位置づけにあるものにもまかり通っていて、まじめな日本人にとってはそれらに付き合うのは疲れるに違いない。十字架会やドイツ婦人会などが行っている社会福祉活動は、日本人にとっては目立つ存在であつたろう。

わたしはある知人から、知人のご祖父が明治の半ば、監獄制度の調査研究を目的に司法省の国費留学生としてドイツに派遣された折の、家族に宛てた書簡集を目にする機会をいただいた。林太郎の留学時と重なり、互いに交遊があつたかもしれない。書簡集においてドイツと日本の世相や日常に触れることができ、本稿を記す出発となったことを付記する。

父の無念

九十年ぶりに発見された口述筆記

講道館に楯突いた男の生涯

細川呉港（会員）

卓越した能力を持ちながら生涯不遇だった父の遺恨を何とか晴らそうと、後生大事に持っていた遺書ともいうべき一代記を、何とかこの世に出したいと——それが娘の悲願だった。

十年ほど前に私は、偶然、神保町の古本屋で、私が小学校時代に夢中になって読んだ少年雑誌をめぐった。

「少年」「冒険王」「少年倶楽部」「ぼくら」といった月刊漫画誌である。主に昭和30年代で私が小学校3年生から6年生ころのものである。その中で偶然出てきた田辺又右衛門という人物を

「発見」した。さてよ、この名前は、どこかで聞き覚えがある名前だ。

それは私が少林寺拳法の創始者宗道臣の生い立ちを調べているとき出会っ

た、神戸のある道場の娘さんから預かった父親の一代記、その主人公の名前だったのである。

田辺又右衛門、この古臭い名前の柔



四代目 田辺又右衛門

術家は、明治から大正、昭和にかけて西日本では有名な不遷流柔術の四代目で、折から嘉納治五郎の始めた柔道に對抗して、生涯にわたり、闘ってきた男だった。数々の講道館の高段者に対して、彼は一度も負けたことはなかった。しかし彼の秘伝の柔術の技は、嘉納治五郎によって次々

に禁止されていたのである。審判員も講道館の息のかかった肝いりが担当し、途中で引き分けにさせられたこともたびたびだった。

彼は晩年、生涯にわたって戦った数々の試合と、嘉納治五郎とのやり取りを弟子に聞かせ、「口述筆記」として残した。しかし、全国制覇をめざす破竹の勢いの講道館に対して、その口述筆記はさまざまな妨害に遭いおおよけにされることはなかった。

田辺又右衛門の武勇伝と試合の経過を直接知っている多くの弟子たちも、やがて亡くなり、あるのはただ、又右衛門の顕彰碑の中の「一代記未刊行」という文字だけである。どれだけ多くの人たちがこの一代記の公開を望んでいたかがわかる。

私は、その又右衛門の娘、田辺久子さん（当時69歳）から、口述筆記の刊行を切に頼まれた。何とか世に出してもらいたい。悲運の父の無念を晴らしてもらいたいと……。そして彼女が長い間大事に秘蔵してきた、和綴じの口述筆記を4冊おしただいた。この口

述筆記を刊行して世に問うことは、彼女の長年の願いだったのである。今から30年以上前（1987年）のことである。

しかし、私はそのとき、田辺又右衛門の生涯についてより、この道場に一時期入門していた少林寺拳法の創始者、宗道臣の話を聞くのが目的であったから、その娘さんの切なる願いを、あまり気に留めなかったのである。

その後30年たって、私は神保町の古本屋で、漫画の中で、まさしくあのときの口述筆記の主人公の名前を「発見」した。田辺又右衛門は、パロディー化されぼろぼろの羽織袴で、いかにもみっともない格好をしていた。柔道との戦いに常には敗けるのが決まっていたいわば柔術家のヒーローであった。

その漫画の描かれたころ、つまり昭和三十年代は、少年雑誌「冒険王」「少年倶楽部」「少年」などの中で「柔道漫画」は主役だった。「イガクリク



熱血まんが「いなずまくん」。月刊「少年」付録 昭和30年9月（光文社）

ん」「ダルマくん」「少年四天王」「嵐の講道館」など多くの漫画や絵物語が連載された。中には、梶原一騎の原作も多くある。今にして思えばそのころ、私はそういった柔道漫画に夢中だった。

口述筆記を思い出した私は、書棚の中に埃をかぶっていた手書きの手記を引っ張り出し、4冊分を一気に読み、驚いた。それは明治から大正、昭和にかけての日本の武術界のありさまから、田辺又右衛門の活躍と挫折、また反対に柔道が数々の柔術を押しつけて、日本制覇をしていく過程が述べられていた。嘉納治五郎や、その高弟た

ち、講道館のいまや歴史上の英雄とも称せられる山下義韶、磯貝一、永岡秀一、飯塚國太郎との試合や、やり取りが生々しく、具体的に書かれていたからである。それは、不遷流のみならず、明治維新で全国のお城に伝わった無数の流派の柔術が、講道館柔道の名のもとに、技と一緒に消滅させられた歴史でもあった。また本当は講道館一といわれた剛勇戸張瀧三郎が田辺と何度も戦い敗れたために、講道館の中で重用されず、またもとの柔術に戻って大阪で道場を開くという話も書いている。田辺ならずとも、多くの柔術家が涙を飲んだのである。

考えてみれば、一大ブームだった柔道漫画の大抵のストーリーは、柔道をやる主人公の少年、あるいは青年が、町の中で羽織袴を着たむさくるしい中年の「柔術」をやる男から、果し合いを申し込まれたり、あるいはいきなり襲ってこられたりする。この柔術家たちは多く髭を生やし、かなり悪人面をして描かれているのが特徴だった。一目で悪い奴ということがわかる。他流

試合を禁止されている「柔道」の主人公は、できるだけ避けて通るのだが、防ぎきれなく、試合をすることになる。町はずれのお寺の境内とか、または因縁のススキの丘だったりする。しかし最後は、主人公の「柔道」が必ず勝つのである。

柔道漫画では常に柔道は正義の味方、柔術は悪であった。柔道をする主人公は試合の前にいきなり「正義は勝つ」などというのである。それが当たり前のように私自身もそして多くの読者もそう思っていた。しかし、本当に柔術は悪だったのであるか？

小学生であった私は、こういったストーリー展開に全く疑問を持つことな

く、「柔術は古臭くて悪い、柔道はいい」という価値観に染まっていた。しかし、田辺又右衛門の口述筆記を読むと、これらは講道館側から作られたフィクションだったことに気が付く。まさに目からうろこであった。

柔道漫画の原点はというと、黒澤明が昭和18年に公開し大ヒットした映画「姿三四郎」である。戦後、昭和20年代後半になって、月刊「冒険王」の副編集長鈴木ひろしが漫画家・福井英一に映画「姿三四郎」のような漫画を描くように薦めたのがきっかけだった。それが「イガグリくん」の漫画であった。大人気を博した。のちにこれはテ



東宝映画「姿三四郎」ポスター

スタッフ

監督・脚本：黒澤明
音楽：鈴木静一
撮影：三村明
編集：後藤敏男

キャスト

姿三四郎：藤田進
矢野正五郎：大河内傳次郎
小夜：轟夕起子
檜垣源之助：月形龍之介
村井半助：志村喬
門馬三郎：小杉義男
お澄：花井蘭子
飯沼恒民：青山杉作

レビにもなる。

さらにさかのぼると「姿三四郎」の映画の原作は、昭和17年に小説家、富田常雄の書いた『姿三四郎』である。彼はその後売れっ子の大衆小説作家として大家となる。

富田常雄について調べていると、面白いことに気づいた。富田常雄の父は、富田常次郎である。常次郎は、灘の生一本で有名な老舗酒屋の嘉納治郎作（治五郎の父）が、幕末に幕府廻船方御用達となり、維新後も海軍権大書記官となったとき、伊豆の韭山で書生見習いとして雇った少年であった。常次郎は当時14歳だったから、そのころの風習からいえば、丁稚奉公として身元を引き受けたのであろう。富田常次郎は、以後東京に出て来て、嘉納家に仕えた。また嘉納治郎作の息子の嘉納治五郎の世話をする年下の御学友として雇われたのかもしれない。常次郎は治五郎の5歳下であった。

身体が弱かった嘉納治五郎が、健康のために天神真揚流を習い柔術を始めたとき、当然のごとお相手は、富田

常次郎だった。

そして何人かの人を集めて、東京下谷の永昌寺で講道館を起こした。

結論をいうと、講道館でのちの四天王と呼ばれ、また講道館の一番頭ともいわ

れた富田常次郎（のち7段）は、その息子、のちに小説家になる富田常雄に、初期講道館の苦勞話、つまり講道館の高段者の前に、常に立ちふさがる柔術家田辺又右衛門に手を焼いたことを繰り返して、話していたに違いない。

また初期講道館で、嘉納とともに柔道に励んだ姿三四郎こと、西郷四郎が尾道で死んだとき、嘉納は「追贈」として6段を与えて、皆の前でいかに西郷がすごかったかを伝えた。このときから西郷はつくられた柔道の英雄になり、伝説化されたのである。小説『姿



辛亥革命取材中の西郷四郎（中列左端）。明治44年2月長沙。前列中央は譚延闓

三四郎』はこのような背景のもとに生まれた。

そして嘉納治五郎の講道館にとっては、天敵ともいえる「不遷流柔術」の田辺又右衛門が柔術家の代表として敵役として登場する。

本当の西郷は、柔道をやっていたのは若いときのほんのわずかの間で、のちの人生は、奥羽越列藩同盟の会津藩の末裔として、長崎で同志と政治結社



孫文が長崎の「東洋日の出新聞」に謝礼に来る。左から5人目が孫文、右に鈴木天眼、西郷四郎。大正2年3月。

を起こし新聞を発行した。明治政府に反発して自由民権運動を鼓舞し、また日清戦争や中国革命の際は、西郷みずから現地に行つて記事を書いた。それが本場の西郷四郎の実像であり、生涯である。中国革命の孫文や宮崎滔天などの付き合いもあった。いわば反骨の志士であった。体制派の嘉納とは逆の立場であった。



梶原一騎原作「あらしの講道館」(昭和30年)『少年』6月号付録(光文社)より

柔術の技は多岐にわたり、江戸時代から各お城に伝わった多くの秘伝を保持していた。かつ長年培われてきた格

闘技である。とりわけ田辺又右衛門の寝技はすごかった。だれも全く歯が立たなかったといってもいい。やがて寝技重視の柔術は、のちの岡山六高やいわゆる高専柔道につながっていくのである。嘉納は寝技を嫌った。

一方、嘉納は大日本武徳会にも、講道館の高弟を送り込み、人事の面でも武術界に君臨する。なにしろ学習院教頭、東京師範学校校長、文部省参事官、宮内庁御用掛と教育界でも要職を歴任した要人であった。その行政手腕もきわめて巧みだった。

その後、柔術と柔道の葛藤は、不遷流のみならず、他の柔術の流派も同じ轍を踏むことになる。柔道の普及の中で、多くの柔術の流派が、看板を「柔道」と書き換えていく。そうしないと入門者が来なくなつたのである。大正8年になると各種柔術は公式に「柔道」という名に改められ、また各種剣術も「剣道」と名前を変えさせられた。

嘉納は、いくつかの柔術の技を禁止

し、かつ青少年の精神修養としての柔道を作り上げていく。いわばスポーツ化していくのである。

このことは現在も柔道そのものが、試合をするうえで、勝負がはっきりしないとか、判定に持ち込まれることが多くなる結果をもたらしている。勝負がはっきりしないため、「指導」とか「注意」がマイナスの点数として加点されるようになり、また寝技もすぐに「待て」がかかる。「差し手争い」が延々と続く。そうこうしているうちに時間が来てしまう。本当はどちらが強いかわからないのである。

毎年ルール改正をしなければいけないのはそのせいであろう。そうなることを田辺又右衛門は、早くから見抜いていて口述筆記の中でもはっきり「予言」している。

「私は講道館柔道が、結局私どもと同じ柔術に戻らなければならぬことを固く信じておりました」と又右衛門は述べている。

口述筆記では、西郷四郎が1度だけ、又右衛門の道場に訪ねて来たこと

も明らかにしており、田辺が「一手お手合わせを」と言って新しい道着を出したにもかかわらず彼は試合をしようとはしなかった。面白いエピソードだ。知られざる逸話はまだまだたくさんある。

晩年、田辺又右衛門は、柔術に伝わる、骨接ぎや整体医療をして生計をたてながら、神戸市、国鉄「兵庫」の駅前に、遷武館（通称赤壁道場）という道場を開き、後進の育成に励んだ。やがて太平洋戦争が激しくなり、神戸大空襲。道場も含めて市街地は全て灰燼に帰す。又右衛門がやっとの思いで建てた道場も診療所も、弟子と一緒に最後まで守ったが、ついに焼けてしまった。

10か月後、疎開先の兵庫県太子町^{いかるが}の間の借りをした舎宅で、田辺は失意のもとに死亡。78歳の生涯であった。

彼の生涯は、現在の柔道に關しても多くの問題を提議している。ひとつは消された多くの柔術の技、そしてもう

ひとつは全柔連と講道館という柔道界の2本立ての組織である。それは田辺又右衛門と嘉納治五郎の時代の大日本武徳会と講道館の關係とも似ている。

田辺は昭和7年、63歳のとき、自分の生涯をふりかえり、弟子の砂本貞に聞き取りをさせている。それがこの「口述筆記」である。だが「何らかの事情により」あるいは妨害により、おおよけにすることができなかった。

この口述筆記が世に出ることを多くの弟子を始め、田辺の娘久子さんは何よりも願っていたのだ。

岡山県倉敷市玉島長尾に田辺又右衛門の墓をやっと探し当てた。蚊取り線香のもとになる除虫菊の畑が続く田園の中、地元では早朝山^{はあさやま}と呼ばれる丘である。

そこには歴代の不遷流柔術家の墓と顕彰碑が、訪れる人もなくひっそりと並んでいた。田辺の顕彰碑は、終戦の翌年、78歳で亡くなってからやっと8年目に、28人の弟子によって建てられている。顕彰の碑文の最後に「一代記未刊行」の文字があった。

現在日本では、柔術の教室がどんどん増えている。特にブラジリアン柔術の普及はすごい。かつて日本からブラジルやイギリスに渡った「ジュウジュツ」が回りまわって日本に再上陸したのだ。アメリカでも、柔道の道場3百に際して、なんと柔術は3千、約10倍の数だという。なぜだろうか。その理由が、九十年前に書かれた口述筆記で今明らかにになる。柔術復活の予言だ。



（田辺又右衛門の口述筆記『柔術の遺恨』は、敬文舎から発行された）

陶々俳壇

句会
陶陶結果
2022年3月

兼題 「菱餅」「若」

馬場由紀子選

紺碧の宙を舞ふスキーや銀世界 橋本紅杓

○正子 北京冬季五輪の大技

落の蔓くぬぎ落葉をかきわけて //

○正子 //

○正堂 //

菱餅の切り口揃ふ手練かな 伊藤正堂

○明良 ひな壇にきりりと角を立てた菱餅の姿は自己主張でしょうか。

○善一 //

菱餅の切り口揃へ飾りけり //

○紅杓 //

菱もちは「ひし形をしたもち」で 桃色、白、緑の三色のもちが重ねられている。一番下の緑は「草」を、真ん中の白は「雪」を、一番上の桃色は「桃の花」を表しているといわれている。諸説があり緑は「健康」、白は「清浄」、桃色は「魔除け」も込められているという説もある。三色の菱餅には無事な成長を願う家族の愛情が込められているといえるかもしれない。菱餅といえど「雛祭り」のお飾りであって、食したのは「端午の節句」の柏餅であった。

雉子鳴くや西向観音替女の墓 大内善一

○二三四

西向観音は江戸三十三観音札所の第二十一番霊場にあたる増上寺内の観音様かと。子育てと安産に霊験があるそうですが、その近くにある墓には、幸せとは縁遠かった替

女も静かに眠っている。季節は春、雉子は

替女の代わりに歌うのでしょうか。春ならではの哀しみを感しました。西向観音については不勉強でネットで調べましたが、調べてから句を味わうというのは本来の句会ではあり得ないことで、俳句の鑑賞としては邪道かもしれません。

西は故郷だろうか、西方浄土だろうか。雉子の鳴き声が替女の叫びのように響いてくる。

○由紀子 //

菱餅を搗く手返す手子ら囃す //

○正堂 //

二人で菱餅を搗くりズミカルに子らが騒ぐ。

○綺李子 //

立ち雛の菱餅反りて風やさし 日野正子

○二三四 //

立ち雛の素朴さに菱餅の変化への観察の細やかさが呼応し、下五の「風やさし」で受け止めています。菱餅が反る、という表現の句がいくつかありました。私が子どもの頃、郷里では菱餅を旧暦に合せて月遅れの四月に搗いていました。暖かくなってきたからか、南九州でもともと湿度が高めのせいか、菱餅が反るのを見たことはなく、新鮮に感じました。

○明良 //

立ち雛と反った菱餅に風が優しく吹き抜ける春のあたたかな景色が絵に描かれたように浮かびます。

迎春花上り坂と知る老いの坂 //

○綺李子 //

「上り坂」とはきついかもしれないが希望を感じます。

菱餅に重ねて思う祖母の顔 瀬崎明良

○紅杓 //

若葉萌え風柔らかき相模川 //

○正子 //

三陸の若布ゆるめに溶く酢味噌 松島二三四

○正子 春の味わいが「ゆるめに溶く」に感じられます。

○善一 //

三陸といえば津波の災害が多く一八九六年には三万人近い死者、一九三三年には三千人以上の死者がでたという。しかしその地で採れる若芽は美味しい。海岸の砂浜に異々と干される様子の風物詩も素晴らしい。そんな若芽を一俵購入し、隣近所に配ったことを思い出した。酢味噌で一杯やるとしよう。

三月や実習生打つレジの列 //

○紅杓 //

○由紀子 //

新年度に先駆けて実習を行う景はよく見かけます。その列は他の所より長いのです。

若沖の鶏の鳴くやも草隴 馬場由紀子

○善一 //

うすくボーとした曇り日、そのおぼろな中で伊藤若沖の描いた鶏が啼くかもしれないなあと空想しているのか、不思議な面白い句である。

○綺李子 //

【果疏涅槃図 誓願寺】伊藤若沖の描いた世界は、パロディに満ちている。野菜を涅槃に見立てて描いたこの画法は日常の中に潜んでいる悪の存在がもたらす深い哀しみや怒りを、対立する世界を超えて私たちに訴えかけてくる。

菱餅や背に重たき子の寝息 //

○明良 //

子のために飾られた菱餅と重い子を背負った母の愛情が寝顔に映ります。

○正子 //

早やずっしりと重みを増した子の初節句。

中国

ウオッチング

編・訳 上松玲子

農村に人材定着を

昔は農村を飛び出すのが若者の夢だったとしたら、今は農村に戻るのが流行りである。都市での仕事を棄て、農村でエコ農場経営をする者、博士号を取得した後、農村で畜産業を始める者などだ。有名な農業ブランドは9割がた彼らエリートたちが運営している。彼らは「新農人」と呼ばれる。「新農人」は従来の農民とも新型の職業農民とも違う。農業農村部2019年のデータによれば、地方にUターン、Iターンして起業する者は全

国で850万人という。彼らは新しい技術や商業モデル、経営理念を地方にもたらし、雇用を作り出す。

しかし現実には、新農人が農村社会のネットワークに溶け込み、産業ネットワークを活性化させるのは容易なことではない。身体は農村にあっても、依然異郷の人である。新農人は農村を理解しておらず、農民とどう付き合ってもいかかわらないため、地元の産業ネットワークと協力して根付くことが難しい。

地方政府の関係部門は彼らと地元民との橋渡し、上流下流企業との橋渡しなどそれぞれの地域の実情に合った形でサポートする必要がある。

『光明ネット』2022年8月17日

臍帯血をめぐる商売に疑問

葉さんは広州のとある病院で出産前検診を待っていた。すると白衣を着た女性が近づいてきて、臍帯血の自己保存

について話し始めた。臍帯血は白血病など80種以上の疾病の治療に有効で、子や孫など三代にわたり利用できる上に、100万円の医療保障も無料で付けるという。一生に一度の機会だと勧められ、葉さんは18年間の臍帯血保存サービスに申し込み、料金を払った。

これは当世日の出の勢いのビジネスだ。臍帯血の利用範囲が広いことは事実だが、その採取と保存には 相応の技術基準がある。また、誇大広告、資格や能力のない業者の参入など問題も多く、売り込み攻勢により産婦の臍帯血無償提供を阻害している。

2016年国家衛生計画委員会とは同年の第12期全人代第4回会議での提案にこたえる形で国立の臍帯血バンク設立準備を表明している。

国の臍帯血バンク設立準備に当たる専門家は、商業目的の個人の臍帯血保存に関する情報は公開になじまないと表

明した。提唱すべきは国の臍帯血バンクへの提供だ。

『新京報』2022年8月24日

シニアの再就職に本腰を

先日シルバー人材の仲介サイトがスタートした。再就職を希望するシニアは希望の職種や経歴を登録、企業はその人材バンクから求人することができるという求職者と求人企業をつなぐものだ。現在までに5千人余の中高年の求職者と、百社以上の求人企業が登録している。

高齢人口の健康状態の改善と教育水準の向上はゆっくりながらも進んでいる。2021年現在、平均寿命は72・2歳になり、教育水準も上がった。つまり、高齢者の社会参加意欲と能力が上がっているといえる。

国務院の発表によれば、第14次5か年計画(2021～2025)に60歳以上の人口は3億人を突破し、人口比率

は20%以上を占めることになる。そして、2035年には60歳以上の人口は4億2千万人に増加、比率は30%を超える。今後10年中国は急速な高齢化を迎えるということだ。

家庭や社会全体としての介護の負担の増大や、労働人口の高齢化、労働力市場の問題は社会の発展に大きく影響するだろう。シルバー人材の再就職を促すことで、人口構成の変化は止められなくとも、社会として老いていく速度を緩めることができ、問題を軽減できる。

人口問題を論ずるとき、老人の就業ニーズと権利については軽視されがちであるが、サイトの立ち上げは、老人の再就職問題を権利保障の角度からみるきっかけとなり、寛容で中高年に友好的な社会形成の契機となるだろう。

〔光明ネット〕2022年9月15日〕

一人っ子世代に支援を

老親の世話と子育てをしつつ、収入維持のため仕事も頑張らなければならない一人っ子世代はやがて1億7千万人に達するだろうと南京大学の風笑天特任教授は指摘する。

彼らは砂時計の最も細い部分と同じだ。最も脆く、最も負荷がかかっている。そして上下の砂は一方が満たされれば、一方は空になる。砂は細い部分には留まらない。こうした問題を解決するには介護や子育てを社会がしっかり担うことだと誰もが言うが、それでは足りない。この世代の負担軽減には、彼ら自身に対する直接的な支援が必要なのは見落とされがちだ。

家庭は社会の重要な構成要素だ。それを支える柱を手厚く支援しなければ、支えが折れてしまう。彼らが家庭に重きを置けば、収入が減る。蓄えがなくなれば貧困に陥る。

実際、彼らが仕事を失い、生活が破綻するケースは多い。

老親が24時間の介護を必要とするようになったとき、それに見合った民間施設やサービスをみつけれなければ、子どもが一人で担わなければならない。その際支えとなる本人へ直接支援を行い、負担を軽減することは、介護や子育て支援するのと同等の効果がある。こうした直接支援もまた公共の責任であり、「挟心一代」といわれる一人っ子世代の困難な状況を打破するのに希望の光を照らすものだ。

〔光明ネット〕2022年9月20日〕

結婚の風習を変えられるか

河南省政府は開封市、平頂山市宝豊県、葉県などの20の地区を婚姻習俗改革の実験地区にすることを決定した。責任者によれば、改革の目的は男性から女性への結納金、持参金である「彩礼」をゼロにすること、簡素な婚礼の普及、伝統的な家庭文化の継承、婚礼の価値を正しい方向に導く

ことという。

近年結納金の金額が競い合うかのように跳ね上がっていることに多くの不満の声が上がっている。訴訟も多く、かつての家族が法廷で争うこともある。2014年、河南省寧陵県では家庭争議の3分の1が結納金に関するものだった。2020年、商丘市の中级人民法院は10万円を超えた部分は全額返還すること、それ以下は案分することという指標となる基準を示し、結納金というハードルを下げ風習を変えするために司法も積極的に動く姿勢を示した。

多額の結納金は、過去における両性の不平等を反映しており、是正されるべきだ。同様に、女性の土地請負権が違法にはく奪されることのない社会、地域の紛争において例えば「趙家は男手が多く強い」ことを考慮しなくてもよい社会の実現が待たれる。

〔澎湃新聞〕2022年9月21日〕



◆令和4年度第7回理事会の議題（10月20日開催）

今月は下記内容で審議を行った。

・確認事項

9月15日に開催された第6回理事会の議事録（案）が確認された。

・決議事項

「令和4年度中間決算（案）」が承認された。

3階の空室状態が続いていること、コロナの影響で賃料の支払いが遅延しているテナントがあることなどにより、収入が減少し中間決算は赤字となった。下期は賃料を確保し最終決算は黒字となる見込みである。

・報告事項

①資金繰りについて（定例報告）

②事務局報告

当協会ビルの3階B、C室（23坪）も空室状態が続いており、引き続きテナントの募集に

務めている。会員の知人友人などに希望者がありましたら、事務局まで連絡いただきたい。

（事務局長 竹前栄男）

同好会だより

〈一石会（囲碁）〉

会員募集中です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

〈俳句会〉

馬場由紀子先生のご指導で、対面と通信と並行して開催いたします。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

みんなの写真館

マッターホルン（表紙）

写真は、スイスのマッターホルンです。標高4478m、アルプス山脈で最も有名な山で、スイスを象徴するシンボルでもあります。ピラミッドのような美しさは、登山家から観光客まで多くの人々を魅了し続けています。スイスで一番有名な山といっても、決して過言ではないでしょう。世界で最も写真に撮影されている山ともいわれています。今回の旅行は麓の町ツェルマットに泊まり、朝は早起きして、マッターフィスバ川にかかる「日本人の橋」へ。傾斜が激しい斜面で氷雪はわずかに残るマッターホルンは、日の出とともに尖塔部が赤に染まり、やがて黄金色に輝くマッターホルンの荘厳な姿に感動した！（姜晋如）

モンゴル「校庭緑化事業」(表4)

日本政府がモンゴルに対し、同国の小学校へ高校教育の向上のため、無償資金を供与して59校の建設または修理を実施した。当協会はその一部3校（52学校、121学校、122学校、このうち12

1学校および122学校はウランバートル市の郊外に所在し、52学校は都心に近いところに所在）に対して、校庭緑化事業を実施し、校庭の緑化と同時に環境教育の一助とした。

121学校と122学校の2校は2014年に植林し、52学校は2015年に植林した。これらの写真は、その一つ121学校の苗木の植え付けから7年目の2022年6月撮影したもの（上）と、そこから数キロ離れた122学校の緑化情景（下）である。機会があれば52学校の植栽後の生育状況もお見せしたい。

モンゴルの基礎教育は小学校から高校までを一貫教育しているため、2部または3部制の教育が普通であり、そのため1校の通学生徒数は2000人以上である。本事業は「緑の募金」の助成を得て実施した。多くの植林事業の公的助成は生熊林および経済林が主であり学校植林は少ないが、モンゴルのように植林事業の歴史の浅い国では学校植林の意義は大きいものがある。これら学園緑化に共通する樹種はポプラ、ライラックなどである。（八島継男）

2022年12月の行事予定

- 6日(火) 14:00 謡曲会(松木先生お稽古)
- 8日(木) 14:00 公開 第15回オンライン講演会(Zoomと対面のハイブリッド方式で実施)
「中国語を生涯の友として」
神崎多實子氏(元NHKBS放送通訳、フリー通訳者、サイマルアカデミー講師)
- 14日(水) 13:00 俳句会(対面での俳句会は休会)
兼題「冬至粥、山」及び当季雑詠から5句を投句(11月末までに)
- 14日(水) 14:00 日中国交正常化50周年記念公開パネルディスカッション:50年の歴史と未来への伝言(Zoomと対面のハイブリッド方式で実施)
パネリスト:古海建一氏(当会最高顧問)、八島継男氏(当会顧問)、新宅久夫氏(当会諮問会委員)、井出亜夫氏(当会諮問会委員)
司会:菅野智博氏(慶應義塾大学経済学部准教授、当会会員)
企画者:村田嘉明氏(当会諮問会委員)
- 16日(金) 14:00 公開 【善隣中国塾】(Zoomと対面のハイブリッド方式で実施)
塾長:矢吹晋氏(横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問)
- 22日(木) 14:00 公開 第16回オンライン講演会(Zoomで実施)
「貴州から見る中国の貧困脱却策」
李海氏(中国貴州民族大学准教授)

※12月29日から1月4日まで、事務局はお休みします。

12月の会議予定

6日(火) <u>15:00</u> 国際交流委員会	15日(木) 13:00 理事会(第9回)
<u>13日</u> (火) 13:30 講演委員会(Zoom)	15日(木) 15:30 広報委員会
13日(火) <u>14:00</u> 環境委員会	

※下線は通常日程に変更あり。

みんなの 写真館



INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)
<https://www.kokusaizenrin.com>

ISSN 0386-1034
二〇二三年（令和四年）十二月一日・毎月一日発行

「善隣」第五三一号（通巻七九八）

発行所 〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）